

# BLUM & POE

Los Angeles, New York, Tokyo

## 関根伸夫 (1942-2019) : 一周忌に寄せて

吉竹美香

関根伸夫は、その作品群を通して共存や相互連関といった概念を我々に教えてくれた最も記憶に残る美術家であろう。大胆で強烈な物質性を湛えたその作品群は、周りの景色を写し出す鏡柱の上に置かれた巨大な石が持つ暴力的な力の間に発生するような、重量と無重力の間の緊張関係を生み出している。関根は、1968年に、彼の空間的一時性を持ったトポロジーについての実験の参照から、「位相/ Phase」といった言葉を用いるようになる。また、1969年には、非永続性や充足と無の均衡についての仕組みを強調するために「空相/ Phase of Nothingness」といった言葉を使うようになった。空間を無限の多様性を持った構造へと操作されうる単一の展性を持った実在として見れば、このような考えは、「ネガな大地」を視覚化するという思考の実験から生まれ、その後「もの派」のコンセプトの核における、知覚上の更新についての現象を生み出した関根の革新的なランド・アート作品『位相一大地』(1968年)の根幹を成していると言えよう。

これらの発想は、初期の関根のメモや、彼の当時のスタジオがあった横浜で開校されていた美術学校 B ゼミ(現代美術ベーシック・ゼミナール)での、空間に対する気づきについての講義で作品を「薄い物体」として捉える、「2つの物体を同時に一つのものとして認識する」といった課題を生徒たちに課していた講義計画にも記されている。教師としても、実験的な美術制作においても、関根や彼の仲間の作家たちは、時間を経ることで変化し発展していく作品に重きを置き、連続性を通じて導かれる現象についての共通した姿勢を有していた。キャンバス、土、和紙、縄、石、スポンジ、油粘土、木やスチール製の柱といった関根が用いた素材は、素材の物理的特性によって条件づけられる緊張関係の一時的な「位相」を強調するために、注意深く選ばれ、採用されたのだった。その試みは、作品を客観的な形態に置くことではなく、構造を通してものの実存を明らかにすることであった。

『空相一油土』(1969年)は、油土の塊を段々と積み上げた立体作品だ。引き裂く、叩く、砕くといった反復的な行為を通して、べったりとした油土が作家の身体や皮膚を覆っていく。李禹煥が語ったように、その瞬間ごとに無限の広がりを感じる一方で、関根は、時間感覚を失っていく。油土や土といった素材から不可分な存在と

なる。彼の身体は、トポロジカルな転換の中に囚われていく。ここでは、関根は、空っぽになった感覚の中に存在すると同時に、自身が放ったエネルギーの残留物によって満たされているのだ。

そして、『空相一黒』(1977年)のような後の作品では、物の状況の中に存在する固有の抽象を検証するための新しい詩的ビジョンを我々に導いてくれた。関根はこう語った、「展示室の床面を海に見立てて、完全なる水平面と考えたらどうだろうか？そうすることによって、島々である彫刻群も生き生きとした、自然の豊穡な姿になるにちがいない・・・どんな不定形な島々も海で完全に水平にわけられる事実によって、その豊穡な自然の姿態となるのだと気づいた。」<sup>1</sup> 海の広大な広がりには、人生において時間が我々に許す内省と期待の交わりに共鳴している。最後に、関根のノートの中で引用されていた哲学者の唐木順三(1904-1980年)による鋭い示唆に富んだ一節で、締めくくりたい。

「神々はすでに去ってしまやなく、来るべきものはいまだ来ない・・・この<間>の時代にあって、過ぎにしものへの追憶、来るべきものへの期待のうちに詩作した。二様の無は、この詩人の追憶と期待を豊かに自由に働かせたと言えるのである。」(唐木順三『鴨長明』より)<sup>2</sup>

翻訳：今井麻里絵

---

<sup>1</sup> 関根伸夫『《空相一黒》についての断章』2013年、未出版。

<sup>2</sup> 李禹煥「存在と無を越えて——関根伸夫論」『出会いを求めて——現代美術の始原(新版)』美術出版社、2000年、156～157頁。